

生き方リサーチ

豊かだけど不安な中で

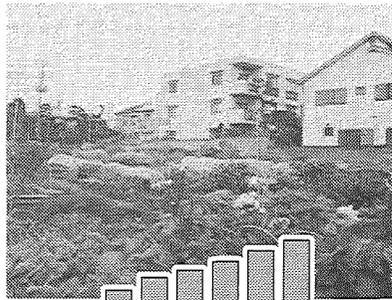
■増える市民農園

過去10年間で約2倍。市民農園の数が年々増加している。2006年度末時点の全国の市民農園数は3246、うち約7割が都市部に集中している。地域別に見ると約半数が関東にあり、関東では応募倍率も1.5倍と全国平均(1.3倍)を上回っている。利用者の年齢層は50代・60代が中心となっているが、一部には40代以下の若い年代が中心となっている市民農園も見受けられる。市民農園人気の背景には、何があるのだろうか。

■今なぜ「市民農園」なのか

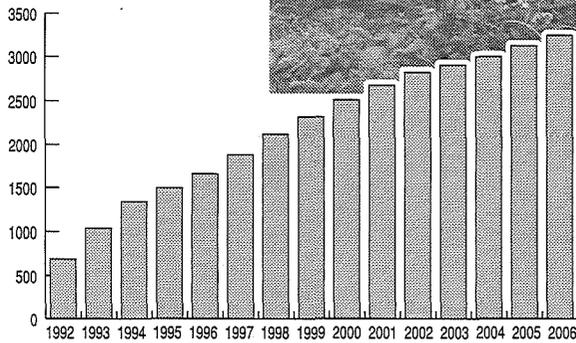
市民農園のルーツは、18世紀末のイギリスにあるといわれている。産業革命の影響によって多くの農民が土地を失う中、救済策として一定の区画を割り当て、農作物の自給を可能にするねらいがあったという。またドイツでは、都市化・生活環境の悪化を背景に、子どもの健康問題対策として整備が進められた。いずれの国でも、今日では市民の憩いの場・レクリエーションの場としての新たな役割を担っている。

今日の日本の市民農園は、ヨーロッパ諸国同様、単に「食糧を生産する」という以上の意味を持つている。自分の手で農作物を育てるといいう行為「食のDIY(DIY)」



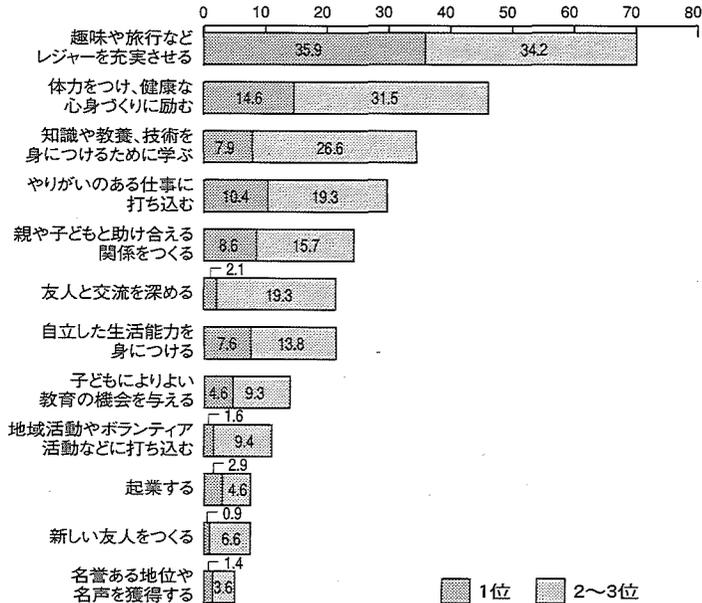
▲住宅地の中の市民農園 (東京都練馬区)

<市民農園開設数の推移>



出展：農林水産省ホームページ「市民農園をはじめよう」より作成
http://www.naff.go.jp/nouson.chiiki/shimin.noen/top.htm

<今後10年の間にしたいこと(単位:%)>



出展：HR | リサーチレポート2007「10年後の社会と生活」(WEBアンケート調査/2007年2月実施/サンプル数3600)

食の「DIY」を求める人々

市民農園人気の背景

Yourself)を通して人々が求めているのは、自然との触れ合いであり、心身の健康であり、家族や地域の人々とのコミュニケーションである。また、食品の安全や食育への関心が高まる中で、安心して食べられるものがほしい、身近な食べ物が作られる過程について知りたいという欲求も、食のDIY志向を後押ししていると考えられる。

将来の生活についての希望を尋ねたヒューマンルネッサンス研究所の調査「10年後の社会と生活」では、「今後10年の間にしたいこと」の上位3位は「趣味や旅行などレジャーを充実させること」「体力をつけ、健康な心身づくりに励むこと」「知識や教養、技術を身につけるために学ぶこと」となっている。「レジャー」「健康」「学び」、こ

れらの欲求をまとめて充足させてくれる場として、市民農園の人気の高まるのも不思議ではない。

■無理をしないDIY
市民農園の中でも、特に都市部のもので人気が高い理由は、その「手軽さ」にあると言えそうだ。「農業」や「田舎暮らし」に憧れを抱きながらも、本格的な一歩を踏み出すことにはためらいがある人、あるいは、都市生活の便利さ・快適さを手放すことなく、生活の中に「DIY」の要素を取り入れた人にとつて、自宅から気軽に通うことのできる日帰り型市民農園や、週末に滞在して楽しむことのできる滞在型市民農園は魅力的な選択肢となっている。特定農地貸付法の改正(2002年)によって企業やNPO法人にも市民農園を開設

することができるようになり、選択肢はさらに多様化してきている。

昨年5月には、高級住宅街として知られる成城(東京都世田谷区)に小田急電鉄(株)が会員制の貸菜園「AGRI SEIJO(アグリリス成城)」をオープンした。園内のクラブハウスにはシャワーやパウダールームが設けられ、スコップや長靴など、必要な作業道具の貸し出しをしている。「いつでも手ぶらで気軽に立ち寄って野菜づくりを楽しめる」が売りだ。利用料は年間13万6500円。仕事や旅行で長期間畑を管理できない場合や、苦手な作業、体力的に厳しい作業の代行サービスや、野菜の栽培や料理等に関する講座を受けることもできる(料金は別途)。自治体等の運営する一般的な市

市民農園と比較すると利用料は割高だが、「食のDIYに興味はあるけれど自分には無理」と思っていた人にとつては、その入り口がぐっと身近なものになっている。

■「次のステップ」も身近に
「生活の拠点は都市に置きつつも、週末には都市から一歩踏み出して、田舎での農業を体験してみたい」という人に人気なのは、宿泊施設のついた滞在型の市民農園である。日本の滞在型市民農園の草分けは、1993年に長野県四賀村(現松本市)に誕生した「坊主山クラインガルテ」。その後、茨城県八千代市や笠間市、奈良県曾爾(そに)村など全国に作られており、利用料は年間50万円程度となっている。滞在型の市民農園の利用をきっかけに、より本格的に農業に携わること

■「安心・安全」を食のDIYから

市民農園の利用を通してより本格的に挑戦してみたくなつたとき、次のステップへの幅が大きすぎると踏み出し難い。その幅を狭めるさまざまな選択肢が出てきたことにより、年代や居住地域を問わず、一人ひとりが、自分の希望やライフスタイルに合った自然な形で食のDIYにかかわることができるよう環境が整ってきた。多くの人が少しずつでも「DIY」を経験することによって、消費者として市販の食品を購入する際の意識や行動も変わってくる可能性がある。「食」という、生きることの根幹にかかわる問題について、誰もが関心と経験を共有することは、現在強く求められている食の「安心・安全」への近道でもあるかもしれない。

(オムロン・ヒューマンルネッサンス研究所 鷲尾梓)